

社会技術研究開発事業 平成21年度研究開発実施報告書

系統的な防犯学習教材研究開発・実践プロジェクト「犯罪からの子どもの安全」シンポジウム

地域の防犯ボランティア力を活かす ～子どもを守る地域防犯に本当に必要な支援とは～ 実施報告書

実施概要

日時： 平成22年3月30日 13:30～17:00 (17:30～懇親会)

場所： 目白大学 新宿キャンパス 研心館

参加人数：約120名(関係者を含む)

目的： 東京都内及びその近郊で活動している自主防犯ボランティアの方々・教育関係者・行政関係者等に対し、本プロジェクトにおける研究者とモデル地域の自主防犯ボランティアたちとの協働を広く周知する。これにより、本プロジェクトのコンセプトを理解して頂き、今後の地域防犯活動の在り方や次期リーダー育成について現場の忌憚ない意見を参加者から抽出すること。

プログラム

13:30～14:00

ご挨拶(プロジェクト代表・JAPE T会長 坂元 昂)

来賓ご挨拶

- ・文部科学省スポーツ・青少年局 学校健康教育課 松川憲行 課長
- ・(独)科学技術振興機構 社会技術研究開発センター
研究開発領域「犯罪からの子どもの安全」片山恒雄 総括

14:00～14:40

本プロジェクトについて 「地域の自立型研修会を支援するための教材とシステムとは」

- ・JAPE Tより、研究開発体制についての概要
- ・東大・沼田助教より、防犯特性分析システムについて
- ・目白大・原教授より、教材開発について
- ・JAPE Tより、教材と支援システムを活用した研修会実施について
- ・園田学園女子大学より、遠隔学習システムを含む支援システムについて

14:40～15:40

モデル地域代表者による発表

- ・東京都足立区立西新井第一小学校区「学校・家庭・地域の連携強化で“地域の安全文化”を高めよう」
- ・静岡県藤枝市広幡地区防犯まちづくり推進協議会「安全・安心は、地域の輪」
- ・広島県広島市西区南観音学区社会福祉協議会「安全で楽しい地域づくり～笑顔あふれる南観音～」
- ・山口県宇部市藤山校区コミュニティー協議会「みんなで守ろう、育もう、地域の安全と未来を！」

15:40～16:00 休憩

16:00～17:00

パネルディスカッション 「子どもを守るための地域防犯に本当に必要な支援とは」

- ・コーディネーター：プロジェクト代表・JAPET会長 坂元 昂
- ・パネリスト・学校安全教育研究所 事務局長 矢萩恵一（西新井第一小学校 前校長）
 - ・広幡地区防犯まちづくり協議会 会長 小柳津茂助
 - ・南観音学区社会福祉協議会 会長 橋川 徹
 - ・藤山小学育成会（PTA）会長 奥谷祐司
 - ・東京大学 教授 目黒公郎
 - ・目白大学 教授 原 克彦
 - ・園田学園女子大学 教授 堀田博史

パネルディスカッション議事録まとめ

コーディネーター

地域で防犯活動を継続し、リーダー育成する上で、どんな支援が必要か

パネリスト

- ・学校安全教育研究所 事務局長 矢萩恵一（以下、矢萩）

研究開発全体について、地域の方々に理解していただくことが大変難しいと感じている。
- ・藤山小学育成会（PTA）会長 奥谷祐司（以下、奥谷）

地域活動の一環として地域のお祭りがあるように、防犯活動におけるリーダー育成にも“楽しい”をテーマにした仕掛けが必要なのではないか。“やらされる”という感覚ではなく“楽しいから、やってみよう”と思わせたい。例えば、研修会の参加の呼びかけも「義務として来い」ではなく、「楽しみにして来いよ」という風にしていけたらよい。

コーディネーター

防犯リーダーになる方は、自然に育っていくものなのか？それとも、後継者は意図的に育成しなければならないのか？もしくは、地域の協議会等の会長や理事長が防犯リーダーとなるのか。その資質や能力は、研修会で培われるものなのか。

- ・広幡地区防犯まちづくり協議会 会長 小柳津茂助（以下、小柳津）

町内会長やPTA会長は1年で任期満了となってしまうが、その後も「広幡地区防犯まちづくり協議会」の役員として残ってもらい、地域の防犯活動を継続してもらっている。
- ・南観音学区社会福祉協議会 会長 橋川 徹（以下、橋川）

社会福祉協議会を母体として、各種団体長さんの育成に力を入れている。具体的には、各種行事について役割分担することにより、各自に責任を持たせている。そして、その団体長さんたちに、自分の団体の後継者選びは任せている。
- ・奥谷
藤山校区における研修会参加者は、他の3つの地域に比べて、防犯活動をしたことがな

いという人たちが一番多かった。「防犯」というキーワードは、様々な地域活動の中の一つのアイテムであり、この「防犯」というキーワードを通じて、地域の中でもっともっとコミュニケーションをとろうよ、というとらえ方をしている、というのが、藤山校区の現状である。

- ・矢萩

西新井第一小学校区では、学校からのお願いで、各町内会や団地自治会などいくつかの団体が、登下校の見守り活動をしている。学校からのお願いではあるが、立つ場所などは自主的に決めて、立っている。但し、「組織」としてのまとまりはないので、それが一つの課題となっているというのが現状である。

後継者を、ということですが、このプロジェクトの研修会を通じて、ボランティアの方々はレベルアップしていくのではないかと考えているが、それだけでは後継者の育成にはならないと思う。地域の防犯リーダーとなるためには、その地域で誰もが知っている人にならないと、例えば、子どもたちに一生懸命に声かけを実践しても、「知らないおじさんに、声をかけられた」ということで無視されてしまう。自分が西新井第一小学校で校長をしている時は、地域の方々にいかにして顔をつないでいくかということに一番苦心した。

- ・園田学園女子大学 教授 堀田博史（以下、堀田）

組織を拡大していくための支援として、我々が研究開発している支援システムがどのように関わっていくことができるかが課題ではないかと考えている。

- ・目白大学 教授 原 克彦（以下、原）

教材を作っているグループとして、いろいろな地域のいろいろな組織取材してまわっている。そうすると、いろいろな方法で組織拡大を推進しているということがわかってきた。例えば、ある組織では、「1人の人が、1人の人を連れてくる」という一本釣りの方法を採用している。これによって、単純に組織のメンバーの人数が倍になるわけである。またある組織では、いろいろなイベントを開催して、人集めをしている。例えば若い世代に興味をもってもらえるよう「食育」をテーマにしたイベントを開催していた。これも「一緒に作りましょう」では、なかなか参加してもらえないので、「試食会」を開催すると人が集まる。その中で有望な人材をつり上げていく、という方法もあるようだ。他にも、組織拡大のための資金集めの方法として、年配の方々が着なくなった着物を持ち寄り、それを若い世代向けの洋服やバッグなどにリメイクして販売しているところもあった。これらはすべて「アナログ的な活動」である。本プロジェクトでは、こういった活動をシステム化していこうとしているが、これらの活動はシステムの中にはどうしても入れることができない。そこで我々の教材開発グループとしては、こういった「アナログ的な活動」の事例を広く紹介していくということを、教材開発に取り入れていこうとしている。

また、どこの地域の人たちも共通しておっしゃることは、「地域の人たちの顔が見える

活動をすることによって、次の世代に活動をつなげていくことができる」ということ。
そういうこと貢献できるような教材づくりを目指している。

・東京大学 教授 目黒 公郎（以下、目黒）

防犯の専門家に話を聞くと、「犯罪はどこでも起こりうる」「地域はいろいろな防犯活動をやるといい」とおっしゃる。しかし、地域では資源も時間もお金も限られているので、なんでもかんでも実行することは無理というのが現実。そういった中で、地域の実情や特性に合わせて、より効果的に効率的な活動を優先して実施できるよう支援するシステムを開発したいと考えている。今は、どこかの地域でうまくいっているという事例を、「うちでも試してみようか？」という感じで実施している地域がほとんどであるようだが、それでもやらないよりはずっといいとは思いますが、やはり、効率が担保されていることが重要なのではないかと思う。そこをみなさんに何とか提示できないかと思っている。

ある場所だけを対象として、「どんな事件が起きているか」ということを調べてみても、それほどたくさんの事件が起きているわけではないので、1～2件しか起きていない事件について「ここではこういう事件が起きやすい」という議論をすることになってしまう。それは正しい議論にならない可能性がある。そうではなくて、似たような特性を持っている地域について日本全体で見ると、起こっている犯罪の数もぐっと増えるので、安定して議論ができる。「やっぱり、こういう対策が効果的なんだな」ということもわかってくる。そうした場合、次に、「じゃあ、この対策を実施したいんだけど」となったら、それは誰ができるんだろうかということが問題になってくる。地域のボランティアが実施すると非常に効果があるものもあれば、ボランティアでは手に負えないような活動もある。そこを「餅は餅屋」として、誰が何をやればもっとも効果的かをなるべくわかりやすく提示できるようにしたいと考えている。

さらに、これによって将来的には、犯罪の特性と対策との因果関係をうまく出すことができそうであるので、そうすると、今、本当に効果があるのかどうか疑問に思いながら活動していることも、「やっぱりこういう活動が重要なんだな」とクリアになり、みなさんに伝わり、より効果的な活動を展開していただけるようなシステムを作ろうと思っている。もう少し待っていただくと、どんどんその仕組みがよくなるし、重要なのは、このシステムにどんどん良いデータが入ってくること。我々は、仕組み自体はだいぶいろいろと構想しているものがあるが、過去にどういった犯罪が起きているのか、そしてどういった対策が行われているのか、というデータが充実してくると、その関係をわかりやすく説明することができるようになる。そこをしっかりとやらせていただきたいなと思っている。

コーディネーター

このやりとりを聞いて、会場で何かご意見がある方は？

会場

自分たちの地域では、様々な組織が単体で動いている。例えば老人クラブとか、婦人会とかPTAとか。やっているんだけど、それらの活動が果たして、本当に子どもたちの安全

のために役立っているのかどうか、検証とは言わないまでも、そのあたりがわかるようになれば、その次の活動に繋がっていくと思うので、そのへんを考えてみたいと思っていた。

パネリスト

矢萩

「やりがい」という言葉がでてきたが、私が校長の時は、子ども達と地域の方々の顔をどうやって繋ぐかということに苦心した。子どもが折り紙を折って、見守り隊のお年寄りに「ありがとう」と言って渡すという、そういったほんの些細なことが、ボランティアの方々の生き甲斐ややり甲斐になっているという印象を受けたので、学校としては、そういった「感謝集会」を実施してきた。

橋川

うちの地域では、学校と「昔遊びの会」を実施し、子どもと地域のお年寄りがふれあう機会を設けている。子どもの顔を覚えたり。

原

子どもにとって、その活動がどういう効果があるのかということは、我々のチームでも考えていかなければならないことだとは思っている。ただ、子どもにとってだけではなくて、たとえば熊本県の「オバパト隊」を例にとると、ここは平均年齢70歳以上で構成されている団体であり、5年くらい前から活動している。そこの隊長がおっしゃるには、5年やっていると半分くらいがお亡くなりになって入れ替わるだろうということを予想しながら活動していたそうである。ところが、予想に反して、この5年間で一人しか入れ替わりがなかった。つまり、防犯ボランティア活動が生き甲斐になっているのではないかと考えているそうである。

目黒

「生き甲斐になった」などのプラスアルファの効果はいろいろあると思うが、本来的には「犯罪が減った」という効果が重要だと思う。現状では、そこがはっきり言えないというのが問題であると思っている。そこをちゃんと知りたい、というのが我々が思っていることである。そういった場合、自分の地域だけを考えると、時間と空間の範囲が狭いので、がんばって活動していても、たまたま起こってしまった1つの事件だけで、「あー、効果がなかった」という話になってしまう。だから、そうではなくて、同じような活動をしている似たような地域特性をもった地域のデータを多く集めて大きな数で考えることによって、どの活動が本当に効果があるかを証明することが可能になるのではないかと考えている。そんな風に、その活動が本当に効果があるんだという根拠を知ることができれば、活動している人たちも本当にやり甲斐を感じながら活動できると思う。そこをきちんと詰めていきたいなと思っている。

会場

片山総括

今日お話を聞かせてもらって非常に面白かったのは、前半の4人の研究者の発表と後半の

地域の方々の発表の間に非常に大きなギャップがあったということである。地域の方からの発表は、いろいろなレベルはあるが、地に足の着いた活動発表であったが、このプロジェクトがそこで、いったいどれだけの役目を果たしているかということに関しては、まだ問題が残っていると感じた。たとえば、矢萩先生がおっしゃったように「地域の人たちには難しい」との意見は重要視しなければならない。そして、このプロジェクトには「システム」という単語が多すぎる。シンポジウムの資料の中の地域の方々が書いた頁には、一言も「システム」という言葉は出てこない。このあたりのことをきちんとしなければ結局「やらせれる」という名のリーダー育成、「自立型研修」というお仕着せ、ということになりかねない、という気がする。

また、「研修が役に立ったか？」というコーディネーターの問いかけに対して、「役に立った」という発言はなかった。これは重視しなければならないことだと思う。(注：シンポジウム終了後、4地域の方々や一般参加の方からは「役に立つ」との言葉を頂いている)

コーディネーター

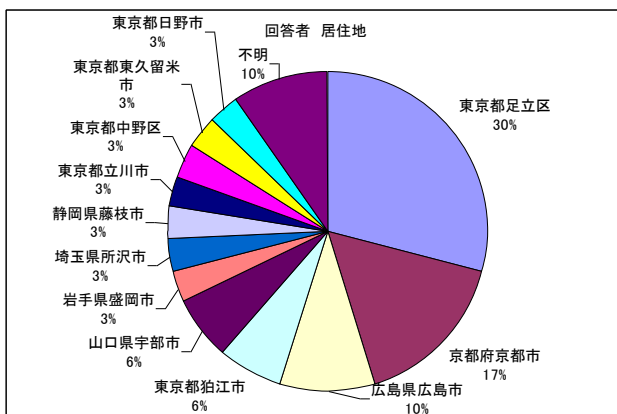
やはり、「言葉が難しい」ということに対しては、易しくしなければならないと思う。また、いろいろなシステムを使っていただいて、そのフィードバックをさらに研究開発に役立てていかなければならない。現状では、まだ実際に役に立つという実感を持っていただけてないということがはっきりわかったので、もっと「人」に通じるようなものを考えてつくっていかなければならない。次年度からは、本格的な実用化を目指した、地域協力者とのやりとりをしていくことが必要であると思った。また、防犯科学を構築していく必要性があると思っているし、何年後かには、これがあたりまえになると思っている。

専門家ではなく、一般の防犯活動者に通じる言葉を使って、研究者は成果を提示し、これを地域の協力者に見ていただきながら、そのやりとりを何度もくりかえし、研究開発を進めていかなければならない。

アンケート結果 回収数：31

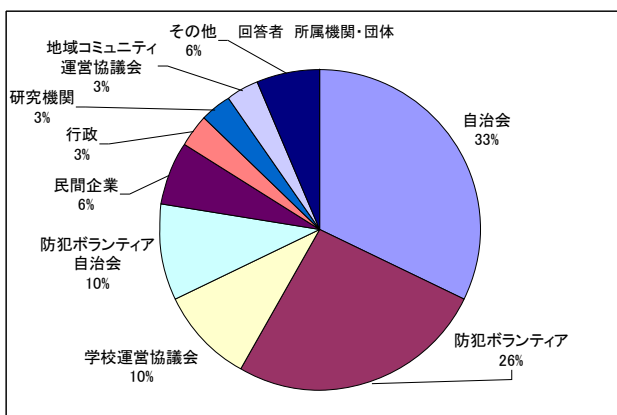
回答者 居住地

会場が新宿区であったにも関わらず、遠方からの来場者も見受けられた。



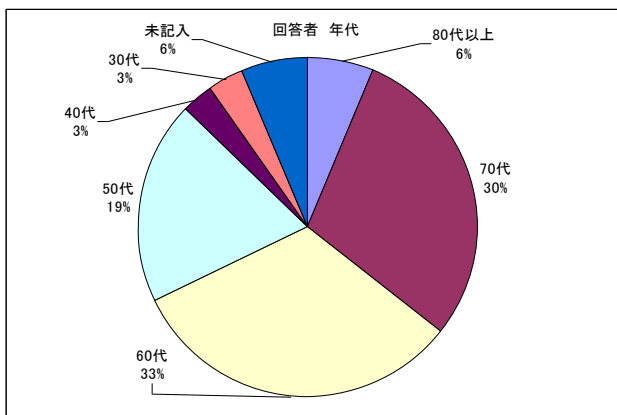
回答者 所属機関・団体

自治会・防犯ボランティアが約7割を占めた。民間企業からの参加者は回答者には少なかったが、回答者以外の方で名刺を頂けた方々が10名ほどいた。
(最終ページの備考の表を参照)



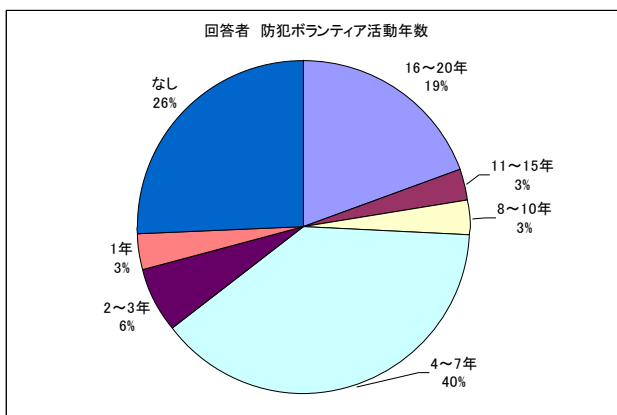
回答者 年代

60代・70代を合わせると、全体の約6割以上を占めており、比較的年齢層の高い方々が回答者に多かった。



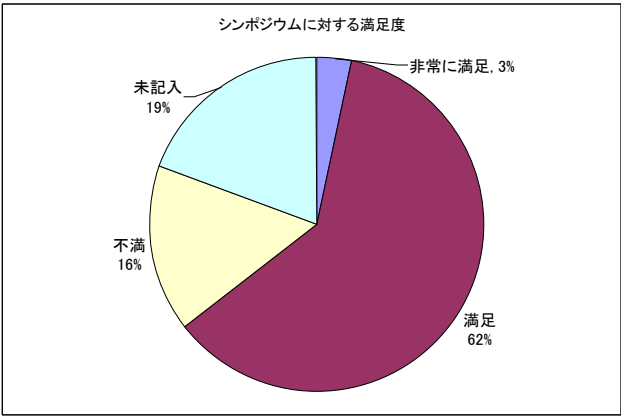
回答者 防犯ボランティア活動年数

年代に関わらず、「活動年数4～7年」が最も多かった。この結果は、調査対象地域で実施した研修会の際に別途行ったアンケート調査においても、同様であった。



シンポジウムに対する満足度

65%の方が「非常に満足」「満足」と回答した。



ご意見（フリー回答）

＜本プロジェクトの研究開発についての意見・感想＞

期待
「指導力アップテキスト」を用いて行った検収結果をもう少し詳しく聞かせて欲しかった。試作版を読んで、子ども達の安心・安全を守る上で、具体的に何をしたらよいかということが非常によくわかりました。今後のますますの内容充実が楽しみです。
支援グループが構築された「防犯情報検索システム」は情報量が大変多く、活用させていただいて、地域活動に役立たせています。分析グループの目黒先生の「似通った多くの地域で分析・検証をする」というお話はよくわかりましたので、システムを早く使ってみたいと思いました。
システムに関しては難しい部分もありますが、情報の早い共有化やホームページから地域の情報を入力して参加できることなどあり、関心を持って傾聴出来ました。

懸念
プロジェクトの効果を証明する困難さを感じた。
まず、各グループによるプロジェクトの概要説明についてですが、システム開発の報告が中心で、難解な内容でした。教材、テキストを作成するという点は、大変素晴らしく、また、各地の活動などをデータベース化するという発想もよいものとは思いますが、ボランティアの方々の活動を評価するという方向にならないければいいと懸念しています。
現在、見守り活動などの防犯ボランティア活動をなさっている方々は、「定年までは仕事一筋でがんばっていたために、地区のことには協力してこなかった。でも、定年となり、ある程度自由な時間を持てるようになったので、せめて、今後は地区のために恩返しをしたい。」という考えでがんばっている方々が多いと思います。もし、そのような方々の活動を評価するような方向になるのであれば、賛成できないな、と思いました。
教材（マニュアル）通りにいかないこともある
研究に関しては、片山総括のご意見に同意。今後の研鑽をのぞみます。

地域の人々から研修についての発表が少なく、どこまで有効なのか、期待が持てるのか疑問に思った。

疑問

システムについて、今回の聴衆の対象者がどのような方とお考えかよく理解できないが、私自身としては、専門的な話を聞いても、よく理解できない。地域住民への話としてはいかがなものか？

総括説明がぼやけていて、全体像がわからないまま始まった。配付資料とそれぞれの講師の説明がよく対応しておらず、話を聞くのも資料を見るのに無駄が多い。何故今、分析システム、研修材料、支援等が重要かがわかりにくい。一般の人の参加をどう掘り出すかにつながりが見えない。

提案

テキストの内容ですが、「地域安全マップ」に関する記述に少し意見があります。「地域安全マップ」については、平成20年12月に犯罪対策閣僚会議において策定した「犯罪に強い社会の実現のための行動計画2008」においても、更なる普及を図ることとしており、更に、警察政策フォーラムでも「正しい地域安全マップ」について勧めています。しかし、この中で「間違った考えで作成されたマップは役に立たないばかりか、有害である。」などと述べられています。それを踏まえまして、試作版テキストの25ページの記述で、上から5行目の黄色で色づけされた箇所で「犯罪発生マップ、ヒヤリハットマップなどの特徴や効果的な活用法などを理解している」と記載がありますが、「地域安全マップ」と「犯罪発生マップ」は全く別なものであるのに、「犯罪発生マップ」も「地域安全マップ」と同種のもので有効なもの、と誤解されるおそれがあると思います。犯罪発生マップは、地域が作るものではなく、警察が、その用途や必要性、公開すべきかしないべきか検討してから公開しているものです。もし、犯罪発生マップを地域で作成した場合、その犯罪の被害にあった人や子どもは、そのマップを見るたびに、被害体験を回想し、トラウマになる危険性があり、有害であると言われています。この記述では、あたかも地域で作るもので、有効なものにとらえられるおそれがありますので、検討修正した方がよいと思います。また、26ページ上のピンクで囲まれた部分の「過去に事件や事故が起きた場所と似ているところ。」という記述ですが、地域安全マップづくりにおける危険箇所の判断基準は、あくまでも「入りやすい」「見えにくい」です。「過去に事件が発生した場所と似ているところ。」という発想ではなく、「入りやすく見えにくい」という観点から判断すべきで、その結果が「過去の事件現場と似ていた」という場合は良いと思いますが、「似ている現場」を探してマップを作成した場合、間違ったものができるおそれがあると思います。地域安全マップの考案者 立正大学小宮教授にも記述については確認をいただいた方がよいのではないかと思います。（もし、既に了解を得ているのであれば、大変すみませんが・・・）

開発グループの方々には、自ら見守り等のボランティア活動を体験なさる必要があると思います。1度や2度だけではなく、ある程度恒常的に活動に参加することにより、現場を良く知ることが

でき、もっと良いものができると思います。
良い教材、指導書な、データベースなど、良いものができていると感じています。しかし、一般の方に、分かり易くしていくのが課題であると思っています。
その他
仮テキストを使用しての実践発表が少なかったのが残念です。

<モデル地域からの発表についての意見・感想>

4 地域の活動発表を聞いて「ふれあい」の大切さ重要性を改めて認識しました。
4 モデル地域の具体的な取り組みの発表を聞いて、我が地域にも取り入れたい取り組みがあり、参考になりました。
各地域でも子どもを守る為にいろいろとやっつけらっしゃるようですね。私たちも体の続く限りボランティアをしていくと思い、がんばっていこうと思います。研修は改めて受けてはおりませんが、大切な子どもさんを守る為に出来る限り見守りましょう。
ご苦労様です。皆様、一生懸命さがヒシヒシと伝わって参りました。ますますのご発展を祈ります。奥谷パネラーのお話のように、声を大にしておりますが、私どもの地域ではまだまだ難しいところも大いに感じられ、淋しいかぎりです。
実活動の方々の発表に感服しました。
どこの地域もがんばって安心・安全まちづくりをしておられ、大変感心致しました。参考になることがたくさんあり、勉強になりました。子どもたちを見守り、やりがい、生き甲斐を持って、今後も笑顔であいさつからやって参ります。
どちらの地域の方も、自分たちの町・学校の自慢話に聞こえます。当然だと思いますが活動方法はどこも同じようなことをやっているようです。共通の課題は、次世代の方にうまくつなげる方法がなかなか名案がなく、一つ一つの行事を積み重ねていく中で若い方に参加していただくことが大事なかなと思いました。
防犯ボランティアの拡大、後継者づくりに関し、様々な地域イベントを活用して極力自然な形で確保するのは、傾聴に値する案だと思う。
未来を担う子ども達のために、代表地区の皆さんの努力と熱意が感じられました。
各団体のご報告を聞きながら、地域の活動を通じて子どもの安全はより保障されると云う事を再確認しました。藤山校区では、幸いにコミュニティが発足してこれまでである防犯団体等との連携が欠かせない事と、校区を網羅した組織をより充実させる必要性を感じた1日でした。
各地域からの発表についてですが、とても参考になりました。いずれも、活発な活動をしており、心強く感じました。今後がんばってくださいと応援したい気持ちになりました。
地域の特に高齢者の子どもに対しての愛情・熱意を感じ感動した。

<パネルディスカッションに対する意見・感想>

パネルディスカッションタイムは、とても充実していてよかったです。

パネルディスカッションでは、司会者の要求するものとパネラー答えのミスマッチがあるように感じた。

今後の団塊世代のリタイアが後継者育成の1つのトピックになると感じた。

ボランティア組織化と実際の活動は重要さを増していると思うが、今後の担い手になるであろう団塊世代とそれ以降の世代の人たちのボランティアに関する感じ方、考え方も変わってくるのではないかと。また地域性により大きく左右されると思われる防犯ボランティア等の活動の担い手はどうあるべきか、議論があるといいと思った。表現は悪いが、犯罪（事故）や非行、いじめの被害者家族達と、一般の人々（本来被害者本人・家族になる可能性のある人）とでは、防犯に関する（特に子どもの安全に関する）見方、とらえ方、考え方は自ら異なるものがあり、どう組織化するのか検討の余地があるだろう。（子どもを犯罪の被害者・加害者にしない世界をつくる市民として）

<シンポジウムの進行に対する意見・感想>

事前打ち合わせをし、発表時間を厳守させるべき

モデル地域代表が3つの発表くらいでよかったのではと思います。

遠方から来られる方々にはご苦労でしょうが、少し早めに集まっていいただいて、発表打合せ（時間配分等）・・・生意気なようで失礼。

プロジェクトの説明も各地域の発表も、自分たちは、ということばかりなのが残念。シンポジウムの目的がわからなかった。

シンポジウムももっとやさしい言葉でわかりやすく表現してほしい。

<本プロジェクトがH21年度に実施した研修会に参加した感想>

今後とも継続学習をして、日本の未来のためにお互い協力し尽力していきたいと思います。学校・家庭・地域がコミュニケーションを密にし、連帯感を持って安全安心まちづくりを進めて参りたいと願っています。

私は、このような研修を通じ、小学校と緊密になることができ、様々な取り組みを実施することで、地域力の向上・地域の活性化となり、地域全体の防犯意識の向上、子ども達の自己防衛能力の向上に繋がると思う。

<その他>

大変参考になり、かつ勉強になりました。

懇親会はとても有意義であった。各先生方と本音で話ができ、各地区の方々と親睦を図ることができた。

なお、先日の研修会で、プロジェクトの発表が終わり、各地区の方々の発表が始まったとたん、一部のプロジェクトグループの方々（大学の教授の方々のようですが。）は、さっさと席を立ち、まったく現場の声を聞く気がないように感じられ、ちょっと見苦しく感じました。

立川市では自治会連合会（12支部）で、子ども・お年寄りの犯罪から守る目的で「あいあいパトロール隊」を設立。12支部すべて発足して現在に至っています。犯罪防止の車用・自転車ステッカーを配布、さらに外出時は買い物や散歩の時などに腕章も入会者に配布していますが、腕章着用の方が非常に少なく、タンスのこやしになっています。今どうやって着用してもらえるか悩みの種で、今後の課題です。何かいいご意見などありましたらよろしくおねがい致します。

一般企業・法人などからの参加者

企業名	部署	役職
NTT西日本	ソリューションビジネス部	地域ICT推進グループ 東京事務所
Sky株式会社	ICTソリューション事業部	顧問
エディックス		代表
学校安全教育研究所		代表
株式会社SCC	教育事業推進本部 産学連携推進室	室長
株式会社アイアンドシー	「日本の防犯」出版事業部	企画・編集 チームリーダー
スズキ教育ソフト株式会社		常務取締役
セコム株式会社	IS研究所 基盤技術ディビジョン セキュリティコンサルティンググループ	研究員
ニフティ株式会社	サービスビジネス事業本部	サービスビジネス開発部
日本財団	公益ボランティア支援グループ	公益チームリーダー

研究機関等からの参加者

機関名	学部など	役職
明治大学	理工学部 都市計画研究室	研究推進員
目白大学	人間学部児童教育学科	准教授 博士(工学)
青山学院大学総合研究所	e-ラーニング人材育成研究センター	客員研究員 経営学部非常勤講師
サイバー大学	語学・教養部	助手 博士(保健学)
プラスアルファ研究所 代表	健康管理士(日本成人病予防協会)	NPO法人健康づくりセンター・アドバイザー

自主防犯ボランティア・自治会等からの参加者

地域名	団体名	役職
足立区	西新井緑町会	会長
新宿区	百人町	
立川市	自治会連合会砂川支部	支部長
港区	club world peace tokyo	代表
中野区	本三宮前町会	防犯部長
墨田区	本所母の会	会長

マスコミ関係者

会社名	部署	役職
教育新聞社	編集局	記者
株式会社 少年写真新聞社	編集部	

行政関係・その他

地域名	団体名・部署など	役職
岩手県	環境生活部 県民くらしの安全課	主任主査
千葉県	旭市立鶴巻小学校	校長
山口県	うべ若者サポートステーション	センター長 総括コーディネーター

シンポジウム 全体の反省点

今回のシンポジウムにおいては、以下の件を反映させる。

- ・登壇者との打合せが充分でなかったために、時間が超過してしまい、来場者から不満の声があがってしまった。
- ・地域協力者たちの発表について、もっとプロジェクトに対する意見（研修会の感想や効果などについて）を発表してもらうべきだった。
- ・シンポジウムの席では、まだまだ一般の方々には、本プロジェクトの意義をご理解していただくことはできなかったが、シンポジウムの後の懇親会の席では、地域協力者に充分理解してもらうこともでき、また地域からの要望も具体的に伺うことができたので、今後の開発に反映させ、さらにホームページや次のシンポジウムなどにおいて、一般の方々にもご理解いただけるような成果を発表していきたい。

（財）日本教育工芸振興会 東京大学 目黒学舎、園田学園女子大学の共同研究開発・実習プロジェクトグループは、平成19年度から5カ年計画で、地域の防犯ボランティアを活動させるために、系統的教育的防犯リタラー育成システムのための学習教材開発に取り組んでいる。3月30日、その中間報告となるシンポジウムが、同振興会の主催により、東京都新宿区の目黒大学で開かれた。

中間報告でシンポジウム

5カ年計画で
学習教材づくりなど

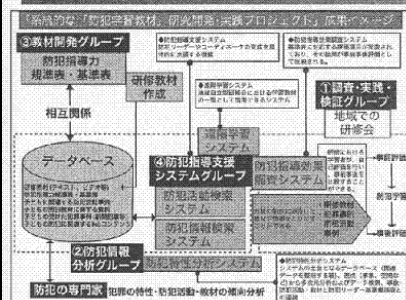
おおよその地理を把握し
説明できる」など、その
「規準」に向けた評価項
目である「標準」を定め



地域に応じた防犯リーダー育成に役立つシステムにしたいと話す坂元リーダー

現場と研究者が話し合い、よりよいシステム開発を目指している

(社)日本教育工学会と3大学が共同研究

[illegible]

子どもの安全のための防犯リーダー指導の
規準表・基準表 Ver. 3(一部)

[illegible]

プロジェクトの成果を発表
リーダー養成研修を実施
異動による引き継ぎなどが課題



モデル地域からは育成システムによって
防犯リーダーを育てる研修会ができた
などとの報告があった

少の数の決定は、
東京都庁と政令の調停
で、小学校では、P.T.
会が活動している。防犯
が切実なところ、親告
では、同教材とシステ
ム化、防犯の意識を
高めること、学校と
地域が協働した、防犯
会、協議して、防犯
リーダー、青年修習会
を実施することが、町
内会では防犯の理解
が深まり、明後の日
が活動が活発になっ
て、その一方で、次代
のなびについて報告した。

英語で書かれた「ムヘーシム」(http://www.kodomo-bonhan.jp/)

山口県教育工学会
TEL 03(5575) 5
運動などを視野に、学校

☐ None of them
☐ A little
☐ A lot
☐ Very much
☐ All of them